No.337号　2010年3月号

あゆみ

社会保険
二本松病院

二本松市成田町1−553
TEL0243-23-1231
FAX0243-23-5086
http://www.shaho-nihonmatsu.com
発行責任者:院内外報編集部

感染の講演会を修了して

ICT　斎藤宏子

今回は、薬剤耐性菌の感染管理というテーマで講演をさせていただきました。テーマが決まるまでやや時間は掛かりましたが、薬剤耐性菌による病院感染（医療関連感染）は大きな問題であり、各医療施設において適切な感染対策が必要と考えこのテーマにしました。

人類は一九四〇年代にペニシリンの工業的大量生産に成功し、以降、次々と優れた抗菌薬を開発した結果、感染症の治療は著しい進歩を遂げました。しかし、一方で抗菌薬に耐性を持ち、感染症の治療を困難とするＭＲＳＡ（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）やＭＤＲＰ（多剤耐性緑膿菌）などの薬剤耐性菌を出現させることになったのです。医療現場や介護施設では非常に深刻な事態を引き起こし、緊急かつ厳密な対策が必要となり皆さんに理解していただき今後の感染対策に役立って欲しいと思います。感染対策活動は、一部の職員の知識や努力だけで効果は得られません。現場で働くすべての職員が基本的な対策を理解し実践して、初めて病院感染（医療関連感染）の低減という効果を得ることができます。皆さんに薬剤耐性菌の中で何が難しい？…という質問したところ「対策方法が分からない」「変な英語？みたいなのが覚えられない…」という回答がありました。確かに、ただでさえ英語が多く混乱しやすい医療業界なのに、感染対策の領域では新しい感染症や病原体、耐性菌や検査方法など覚えなければいけない英略語が毎年のように増えていくわけですから、本当に大変です。私も感染対策に関わる前は聞きなれず、頭の中は？が何個も現れていました。聞いた単語も正確に書く事も出来ずにいました。（今でも英略語は苦手です…）今回は講演会という機会がありましたがみなさんが感染対策のこととかで疑問に思うこととか、知りたいことなど感染対策ニュースを通して答えていけたらと思っていますのでＩＣＴメンバーに声をかけてください。

今回の講演会は地域の介護施設の方々にも参加していただきました。薬剤耐性菌による病院感染は、大きな社会的な問題となり、各医療施設においては適切な感染対策がもとめられようになりました。講演会後に話をする機会があり、今後も各介護施設の方々と情報交換をしていきたいと思います。現在では世界的な規模で深刻になりつつある薬剤耐性菌の問題ではありますが、一施設での部分的な対策では効果がありません。それぞれが共通認識を持って感染対策を実践することが大切だと思っています。今後も皆さんのご協力をいただくようになりますがよろしくおねがいいたします。

退職にあたって

事務局長
猪狩　明

定年に当り一言お礼を申し上げます。まだまだ若い！　元気！　口も達者と思っていましたが、勤務延長期間満了、停年となりました。平成十七年四月に採用いただき、僅か五年間の勤務でしたが皆様にはお世話になりありがとうございました。

病院は、患者として診察を受ける・治療をしていただく程度の知識しかない素人でしたが、前院長をはじめ皆様方のご指導をいただき何とか責務は果せたかなと思っております。

一方、職員からは「今度は喧しい局長が来たぞ！」と受け止めた方も多いことと思いますが、それらは、私の病院を思う心　改善すべきものは改善するという気構えで臨んで結果ですのでご理解いただきたいと思います。

私は、病院というものは、具合が悪い時には何の抵抗もなく足を運んでいただけるものであり、そのため、職員は患者を気持ち良く受け入れる心構え、接遇が重要と思っています。それは、医師、看護師に限らず全ての職員です。

しかし、勤めて内から見る病院は一つ一つがビックリの連続でした。そんな中で、一番の驚きは「①組織を知らない　②役割を知らない　③責任を知らない」そういう職員が、基幹職員を含め見受けられたことです。そのため、一人の職員の考えが組織の方針あるいは決定として一人歩きするという組織なき組織を感じ驚いたものです。

当時の病院を取り巻く環境は、平成十四年十二月に厚生労働省の「社会保険病院の見直しの基本方針」に基づき経営改善三ヵ年計画の最終年でしたが、職員の意識は変わっているの？と思われても仕方のない状態であると思い、意識改革を連絡会議・朝礼等で訴えてまいりました。

私自身、「組織、役割・責務」は知っているとは思いながらも、病院に対する知識が全くない、医療用語も分からない。そんな時、当時の院長から、「昼は机に座ることないから毎日院内をラウンドしろ」「机の仕事は夜でも出きる」と叱責されました。

地下から五階、屋上と足腰にはきついものもありましたが、病院環境を知る、設備を知る、職員の顔を覚えるため毎日ラウンドをしました。

このラウンドを続けているうちに、一部の職員から「毎日、監視にきている」と陰口を叩かれたこともありました。

このように、毎日が初めての経験の連続でしたが、年の功か環境にも思いのほか早く慣れ、何とか職責を果せたかなと自分では思っております。

今後、社会保険病院の受け皿法案が成立することにより、腰を落ち着けた病院運営ができますが、一方、法案の趣旨に基づき、色々な意味において大変厳しい病院経営が求められることになります。是非、職員一人一人が管理者は管理者の立場で、基幹職員は基幹職員の立場で責務を果し「地域に必要な、なくしてはならない病院づくり」をお願いしたいと思います。

ご案内のように、私は、引き続き一年間嘱託職員として勤務させていただくことになりますが、新たな気持ちで職務を果して参りますので引き続きのご指導をお願いいたします。

停年退職のご挨拶にならない内容となりましたが、これも引き続き「同じ机で、同じ業務を担当」させていただくということで、なかなか停年を実感できないためですのでご理解をお願いいたします。また、一緒にやりましょう！　煩いのは健在なり。

医事課長
丹治雅和

病院前の畔道に蕗の薹が顔を出しておりました。春の到来を告げております。

当院に就職して四十二年間、振り返りますと走馬灯のように思い出します。

なんだか、長いようであり、一瞬の間のようであり、いまだにやめるということが夢の中の出来事のような気がしております。

初代津川院長は、常に患者本位の医療に心血を注がれておりました。常に優しく、ゆっくり、丁寧、時には厳しく接しておられました。私たちにも多くは語らず、態度で導き下さいました。夕方になると、先生からお声がかかり、日本酒を片手に人生訓や病院の在り方についてお話を頂きました。

昭和四十四年から四十五年頃に起きた大学紛争の影響で、開業等で退職した医師の補充が思うようにいかず、ついに内科医一人、外科医一人という最悪の事態

に陥り、極めて劣悪な悪条件の下ではありましたが、再建指定病院群から脱出することができたのも、二代目（故）岡本院長の陣頭指揮のもとに、職員一人ひとりが危機意識をもち、努力の積み重ねがあればこそと思っております。

平成五年新しい病院に移ってからは三代目大森院長の下に改革が推し進められる中、老健施設、訪問看護ステーションの開設、経営も順調に推移してきました。これは、院長の強いリーダーシップと時宜を得た明確な基本方針のもとに一丸となり頑張った職員の成果であると思います。

一つだけ自慢できることがあります。それは、みなさんの心温かい励ましとご指導によって四十二年間、無事（正確には平成十五年六月より体を壊し多大なご迷惑をお掛けして過ごさせ頂いた感は否めませんが）過ごせたということです。

このことを胸に、みなさんの思い出をいつまでも大事にしたいと思っています。

病院を取り巻く経営環境が大きく変革しています。高齢化社会への突入、社会環境変化による疾病構造の変化、医療技術の高度化・専門化、多様化の傾向にあたる医療ニーズは量から質へと移行しつつあります。職員皆様の英知の集結によって必ずや輝かしい歴史をかざることができると思います。

生みの苦しみからイクツ脱皮出来たかは、定かではありませんが、苦しんだこと、真剣に悩んだこと等が、今では楽しい、思い出で一杯です。

みなさまのご健勝と病院の発展をご祈念申し上げお礼の言葉といたします。

最後になりますが、夢は逃げません。夢から逃げないでください。ありがとうございました。

四階科長
屋田喜久子

私は昭和五十三年十月に二本松病院に転勤となり、看護師として三十一年間勤務させて頂きましたが、この春大過無く定年を迎えます。この間私を指導し、支えて下さった病院長や看護局長を初め多くの諸先輩の方々、また、何よりも患者様や地域の皆様方に心から感謝申し上げます。

振り返りますと、当時の病院は現在の外来駐車場に建っていました。病院の玄関には下足係りの方がいまして、来院された人から靴を預かり、番号札と交換してスリッパを渡していましたが、今は懐かしい思い出の一つです。私はその年に立ち上げたばかりの人工透析室に配属となりました。透析の勤務経験が全くなかった私は、大変不安ではありましたが、医大の透析室に一ヵ月間の研修に出して頂きましたので何とか勤めることができました。思えば患者様と一緒に芋煮会を開いたり、バレーボールを楽しんだりと数々の交流と親睦を重ねてきましたが、これも楽しい想い出の一つです。透析室は当初五名程の患者数でしたが徐々に透析室も拡大し泌尿器科の病棟として運営されることになり、勉強会も活発に行われるようになりました。

私は五十五年に二男を出産し外来勤務になりましたが、当直室が外来待合室のホールにあり、朝早く患者様にドアをたたかれ飛び起きて対応したことも今は懐かしく昨日のことのようにように思い出されます。

その後、内科病棟、産科病棟、外来を経験し、現在は四階の内科病棟で定年を迎えることになります。私はこの三十一年間、患者様の立場にたった看護の実践を追及してきましたが、いつもいつも反省させられることばかりでありました。

社会保険二本松病院は、これから独立行政法人「地域医療機能推進機構」による運営体に変わることになると思いますが、地域医療に貢献する病院として「より良い医療」「良い看護」が実践出来る病院として前進していけることを心より願っています。

栄養課
篠崎栄子

平成元年より二十一年間二本松病院栄養課にて、名誉院長及び院長はじめ栄養課の皆様の心温まるご指導ご協力を頂きながら、健康で定年を迎えることができましたことに心より感謝致します。

患者様の立場に立った、薄味で美味しい治療食つくりはもちろんの事、高齢者の増加にともない食べる事が困難な患者様には栄養課スタッフ一丸となり嚥下食つくりに取り組んできました。

病院内で医療技術部の一員として働けた事を誇りに思い喜んでおります。平成十三年には福岡で開催された日本社会保険医学会にて二本松病院での「美味しい食事つくり」を発表させて頂いた時の緊張感が今でも思い出になっています。又、秋には我が家で丹精込めて咲かせた菊の花を病院玄関ホールに展示して頂き、感謝しております。

今後の二本松病院の益々の発展と皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

わが家のアイドル

ボクの名前は『チロ』。雑種で髪はおしゃれな茶系、男前4才の男子です。よろしく！こちらの家に来て4年目です。一人でお留守番をしなくちゃいけないけど、他の人が来るとブルブル震えちゃう！　家族を守るため今日もがんばってお留守番しています。

一番の楽しみはお母さんの帰り。一緒に散歩や食事、おしゃべり……

お母さんの期待にこたえられるよう日夜芸に励んでま～す。

理学部　本田　澄子

栄養課より

ためしてレシピ！

もやしとえびのザーサイ炒め

ザーサイを調味料代わりに炒めるので、味付け簡単な一品です。

＊材料　4人分

えび（殻付・むきでも）……300ｇ
もやし……300ｇ
ザーサイ（びん詰）……80g
鶏ガラスープの素（顆粒）……小さじ1
酒・塩・サラダ油・こしょう

＊作り方

①殻付のえびは、殻をむき、背わたを取り、えびをバットなどにならべ、酒大さじ2と、塩を少々振っておく。ザーサイは、粗みじんに刻んでおく。
②フライパンにサラダ油を入れ、中火でえびを炒め、色が変ったら取り出しておく。
③そのフライパンにサラダ油を足して、中火でザーサイともやしを炒め、全体に油が回ったら、えびを入れて、スープの素、塩、こしょうを各少々ふってひと混ぜすれば出来上がり。

＊12月号の材料に「もめん豆腐1丁」は、誤りでした。お詫びいたします。

庶務だより

退職（3／31付）

医局　阿部　宣子
事務局長　猪狩　明
医事課長　丹治　雅和
4階科長　屋田喜久子
栄養課　篠崎　栄子

二十一年度の行動規範
笑顔・親切・真心

今月の目標
反省から得る　大きな一歩

八田　美幸

編集後記

「暑さ、寒さも彼岸まで…」と言いますが、今年になって雪の降る日が例年になく多く感じました。もう雪かきはたくさんだよ！と思った数日後は暖かくなって、また朝晩は寒くなり自己の体調管理に気をつけながら、まもなく近づいてくる桜のたよりを楽しみに今はじっとたえています。

定年退職する職員の方、長い間お世話になりました。

（M・K記）